

ブダペスト滞在記(1986年秋)

——Tさんへの手紙——

堀 林 巧

前略

お元気ですか。ブダペストで受け取った便りによれば、僕が日本を発ったすぐ後に食中毒にかかるなどして大変だったようですね。

当方2ヵ月半のハンガリー滞を終え、11月7日に無事帰国しました。6、7月のアメリカ西海岸の旅の後そうだったように、今回もまた金沢に戻る前に北海道に行き、あなたにブダペスト生活のあれこれについてゆっくり話す機会を持ちたかったのだけれど、残念ながら今回はその時間的余裕がありませんでした。それで、カロチャ産の美しい刺繍の施されたテーブルクロスのおみやげに添えてブダペスト滞在の印象記を送りたく筆を取ることにしました。

帰国後既に一週間以上たつというのにまだ時差ぼけが続いています。昼間猛烈に眠く意識は朦朧。それでも我慢して起きているものだから夜の寝つきはいいのだけれど夜中に何度も目を覚まします。これまで何度かの海外旅行の際も、入国と帰国直後の2～3日このような経験をしたことがあるものの今回のように時差ぼけが一週間以上も続くのは初めてのこと。大学の同僚にそれを言うと「ブダペスト生活が快適で帰国したくなかった気持ちが身体に正直に現われ、いつまでも当地時間が続くのだろう」と冷やかしますが、それも案外的を得た説明なのかも知れません。

それはともかくとして、実際のところ様々の意味において収穫の多い旅でした。エコノミストないし社会科学研究者という立場から言えば、滞在時期がハンガリー動乱30周年（動乱開始は1956年10月23日）と丁度重なったおかげで、それに因む各種の催しを直に見聞することができ普段ならなかなか表

面化しない、したがって外部の者には掴みにくい動乱についてのこの国の人々の様々な感懐の一端に触れることができましたし、また僕が籍を置いていた科学アカデミー経済研究所のスタッフが皆親切で、会いたい人を指名すればすぐ気軽に紹介の労を取ってくれ、毎日のように当地のエコノミストと有益な議論を持つことができた事も目下進行中の「経済改革の第三段階」についてリアルな認識を得るうえで有意義でした。ブダペストからの便りの中に書いたように、ふとしたきっかけからカール・マルクス経済大学の教員・学生に向けて3度の講演機会を持つことになったのも僕にとって良い経験でした。

でも今回の滞在の最大の収穫物は何といっても当地の人々との素敵な出会いにあります。研究者としての好奇心の充足もそれはそれで意味あることには違いありませんが、僕が異国の旅に求める最大のものはいつの場合も当地の人々との普通の人間としてのコミュニケーション。この点でブダペストの人々は僕の欲求を充分すぎるほど満たしてくれました。かつてこの国に住み、この国の人々を愛するようになり、第2の故郷として帰国後何度も足を運んでいる石本礼子さんの優れた随筆集『東欧の窓ブダペスト』（朝日ソノラマ、1982年）の中には、気さくで人懐っこい「天性の社交家」としてのブダペストっ子と彼女の心暖まる交流がいきいきと描かれており胸をうちますが、僕もそれに似た多くのラッキー・ミーティングを持ちました。ハンガリーにもっと長くいたいと思わせ、来年もう一度この国に滞在（4～10月）する気を起こさせたのは何よりもそうした当地の人々との触れ合いに他なりません。

そこで、ハンガリーの市民生活に因むあれこれの話題を取り上げるこの手紙の中に、ブダペストで会った人々をできるだけ多く登場させながら筆を進めてゆくことにしたいと思います。

(1)

「アメリカの印象は如何でしたか。あの辺り一帯にはブダペストの金持ちが多く住んでいるのですよ」と、いたずらっぽい笑みを浮かべたエレニさんから話しかけられた時、てっきり僕は、7月のアメリカ西海岸の旅の印象を尋ねられているのだらうと解し、しかしそれにしては前後のセンテンスが繋がらないことに戸惑い、彼女のジョークを理解することができませんでした。エレ

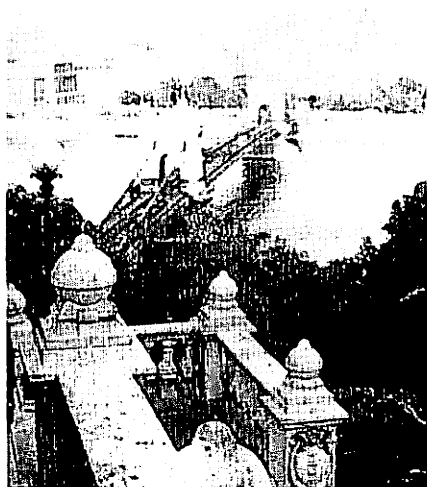
ーニさんはブダペストで名の通った絵かきさん。そして、1985年9月からルカーチ研究をテーマに当地で留学生生活を送っておられる金沢大学教養部丸山先生のアパートメントの大家さんにあたります。日本を発つ前丸山さんを介して彼女に幹施をお願いしておいた下宿先をブダペスト到着の翌日に訪問、すっかり気に入入り、その場で契約を済ませ、その報告とお礼にとエレーニさん宅を訪れた時の彼女の第一声はそのジョークだったのです。勘の悪い僕も彼女の目配せで手に持っていたブダペスト市内地図を眺めた時彼女の言っていることの意味に気づきました。僕が先ほど契約してきた下宿(ハンガリー式英語でプライベート・ルーム)は、ハンガリー史上に名を残す一連の偉人像が配置されペスト名所の一つとなっている「英雄広場」から東に一キロばかりの地点「コロング通り」の一角にあります。このコロング通りと下宿先の近くで交差している南北の通り名が「アメリカ通り」なのです。さらにその西側が「コロンブス通り」。そしてもう一つ西側の通りが「メキシコ通り」となっています。まるでアメリカ大陸のどこかの町のように。エレーニさんは「アメリカの印象は……」という言い方で「下宿先あたりの環境は気に入りましたか」と尋ね、「アメリカに因んだ名を冠した所だから高級住宅街なのですよ」と説明してくれていたというわけなのです。たしかに「アメリカ通り」のあたり一帯は、排バスと騒音に悩まされるダウンタウンとはすっかり趣きを異にし、静寂で並木道の緑も豊か、小綺麗な平屋の立ち並ぶとてもよい環境に恵まれた所です。道行く人々の足どりもゆったりとしています。ブダ側にあるそれと合わせ、ブダペスト二大高級住宅街の一つと言われることにも納得がゆきます。

ところで、改めてブダペスト市内地図をじっくり眺め気づいたことですが、外国、外国都市名ないしは外国人名を通りや広場の名称として使うケースは稀ではないようです。たしかに、ブダペストの地名で最もよく目につくのはコシュート、ラコーツィ、セーチャーニ、ペテフィ、イシュトバーン、ディアークなどハンガリー史を色彩する歴史上の人物ゆかりの地名ですが、他方においてビーチ(ウィーン)、モスクワ、ブカレスト、フランツァイ、パージ(パリ)、シュバイツ(スイス)など外国、外国都市名を地名として借用したケースも結構よく目にとまります。第一次大戦敗北によるオーストリア・

ハンガリー二重帝国解体にともないハンガリーは宿願の独立を達成したものの、トリアノン条約によって旧領土の多くを失い、それがハンガリーをして第2次大戦期ナチス・ドイツへの接近を促すことになったことはよく知られるところですが、旧ハンガリー領（ルーマニア、ユーゴスラビア、チェコスロバキアの一部地域）にあった古都名（ハンガリー名）を現在のブダペスト市内地図の中に見い出すことも可能です。

ハンガリーのこれまでの歴史からしてヨーロッパ地域の国名や都市名のブダペスト地名としての借用については合点がゆくものの、なぜアメリカに因んだ地名まであるのか。ドナウ川で隔てられたペストとブダ両地区を繋ぐ8本の美しい橋のうちでも最も歴史が古く(1849年に建造)、重厚さと美しさの点でピカーのセーチェーニ橋（＝ランチヒード）左岸（ペスト側）の広場名がルーズベルト広場であることを知った時ふとそうした疑問にとらわれました。

しかし、歴史書を繙けばこの国とアメリカ合衆国の関係は意外と密接なのです。1848～49年の対ハプスブルグ家独立運動敗北の後、革命指導者コシュートはイギリス経由でアメリカにわたり当地で支援を得るため活動、やがてヨーロッパに戻りイタリアで没しますが、コシュートと行動を共にしてアメリカにわたり、この国に残った4,000人のハンガリー人は最初のハンガリアン・アメリカンを形成し、そのうち1,000人は南北戦争



（ブダの王宮からペスト側をながめる。中央がランチヒード）

の際北軍に加わり活躍しています。その後、二重帝国時代には困窮した農民層のアメリカ移民があい次ぎ、その数は200万(但し、マジャール系は60～70万、他は旧ハンガリー領のスロバキア人、ウクライナ人、南スラブ人など)にもものぼったと言われています。さらに、戦間期（及び第2次大戦期）のホ

ルティ時代には弾圧を逃れるためユダヤ系ハンガリー人をはじめ多くの優秀な知識人がアメリカに渡っています。たとえば、原爆開発に携ったシラード、数学者のフォン・ノイマン、ポランニー一族(カール・ポランニーについて言えば1986年は生誕100年。僕の滞在中も、国際シンポ、TV特別番組など彼にちなんだ各種の催しが行われていました)など。ハンガリーが生んだ世界的作曲家バルトークもまた40年にアメリカへ亡命しています。第二次大戦後も、1956年動乱で国を去った20万のハンガリー市民のうち多くがアメリカとカナダに向ったとされています。

こうして現在アメリカ合衆国に居住するハンガリー人の数は約70万。アメリカ合衆国はハンガリー人の国外居住先として二番目に位置する国なのです(ちなみにトップはルーマニアの170万人。1981年の統計で、ハンガリー国内人口1,070万に対し国外居住人口約400万。このうち300万人はハンガリー旧領土の現在における帰属国、ルーマニア、ユーゴスラビア、チェコスロバキア、ソ連に居住。したがって文字通りの「移民」という観点から見れば、アメリカ合衆国はハンガリー人にとって最大の受け入れ先。次いでカナダの10万人)。

以上のコンテキストの中で考えれば、「アメリカ通り」、「ルーズベルト広場」という名称の謎も解けようというものです。そして、こうした状況の反映でしょうか、ハンガリー人の多くは親米的です。(親日的でもあります、アメリカの場合とは異なり両国——ハンガリーと日本——の歴史的関係の乏しさ——特に利害関係における——がその要因であるように思われます。もちろん、ハンガリー人がフィンランド人と並び起源をアジアに持つ稀なケースのヨーロッパ人であるが故、アジア人に対して親愛の情を持つといった説明も可能なのですが、僕の場合、ハンガリー人からそのような心情を聞かされたことはありません)。たとえば、若い世代には外国の中でアメリカの影響力が最も強く、彼らの「英語」はイギリス語ではなくて多くが「アメリカ語」。それに、米画の上映される映画館はいつも若者で一杯です。映画と言えば、今年その漸新な映像手法で話題となった米画「ストレンジャー・ゲン・パラダイス」の主人公達はニューヨークに住む若いハンガリアン・イミгранトでし、滞在中、ブダペストで封切られていたハンガリー映画「ナジ・ジェネラシオ(=The big generation)」の主題はハンガリアン・アメリカンの

里帰りでありました。

さて、ブダペスト滞在印象記の冒頭に、それとはいささか場違いなハンガリー＝アメリカ関係にちなむエピソードを持ってきたのにはそれなりの理由があります。外国を旅していてもいつも実感するのは固定観念の浅薄さということです。ハンガリーにおいてもそれを経験しました。ハンガリー＝ソビエトブロックという固定観念となっている等式が、この国の一面を物語るにすぎないものであることを冒頭で示しておきたかったのです。来年アメリカに留学するあなたが広い視野で異国文化に接する際の一つの参考になれば幸いです。

(2)

さて、ブダペストで出会った人々のうちで最初に紹介しておきたいのが、何と言っても2ヵ月半生活を共にしたコロン通りの大家さん夫妻のことです。ヨーシュカさんとカティさん。共に稀に見る好人物でした。カティさん50才、ヨーシュカさん73才。20年前に結婚、ヨーシュカさんにとって2度目、カティさんにとっては3度目の結婚にあたります。カティさんがヨーシュカさんに一目惚れ、23の年齢差（当時カティ30才、ヨーシュカ53才）などものともせず、出会って数日後にもう大恋愛に陥ったといえます。ヨーシュカさんは当時外科医、カティさんはグラフィック・デザイナー。

しかし新婚間もなくして交通事故に遭いヨーシュカさんは下半身不随となりその後車椅子生活を余儀なくされることになります。それでも3年間のイギリスでのリハビリのあと、改造した手術室で立派に外科医としての職務を遂行したという強靱な意志の持主です。当時車椅子の外科医として新聞などでも取りあげられブダペストで話題となったといえます。今は年金生活を送っており、カティさんの仕事（グラフィックデザイン）を手伝うほかは読書にふける日々。文学、絵画、音楽どれをとっても造詣が深く、カティさんも含め毎日数時間彼らとそれらのテーマについておしゃべりするのが僕にとって楽しい日課となりました。ヨーシュカさんはイギリスをこよなく愛すジェントルマン。寛容をモットーとし、いつも笑みを絶やすことなく、毎朝出会う度に手を差し出し「グッドモーニング。ハウアーユー」と尋ねることを忘れません（彼は英、仏、独語に堪能。カティさんも英語が達者なので僕たち

の会話は英語で始まりました。僕のハンガリー語のボキャブラリーが増えるにともない、単純な会話はハンガリー語に移っていったのですが。近所の誰もが尊敬と同時に愛情を込めて彼のことを語る理由がよくわかります。良い友人に恵まれ、とりわけ若い女性に好かれるようで僕の滞在中にも何人かのファンがヨーシュカ宅を訪れていました。後で述べる語学学校で知り合った若い日本人女性バイオリニストのよう子さんも例にもれずすぐに彼のファンになりました。



(ヨーシュカ宅の庭で、左側よりゆう子さん、筆者、ヨーシュカさん)

カティさんもチャーミングな女性。ヨーシュカさんとの結婚式当時の写真を見ると若い頃のエリザベス・テラーによく似た美人。本人は今ではもうすっ

かりおばあさんになってしまったと謙遜しますが、今でも充分魅力的。濃い眉と意志的な目の輝きが、パッションネートでインディペンデントな彼女の性格を表に現しています。3度目の結婚で、しかもヨーシュカさんの事故後の苦労の中で初めてリアル・ラブを知ったと言いますが、2人のそばにいと互いに心から相手を信頼し愛しているのが伝わって来て僕の方まで心洗われすがすがしい気持ちになります。

カティさんと前のハズバンド、トマスさんとの関係も良好で、別れた後は互いにベスト・フレンド。「嫌いになって別れたのではなく、私がヨーシュカを彼以上に愛するようになって別れたのだから離婚後もずっと仲がいいのは自然なこと」と彼女は言います。僕の滞在中も何度かトマスファミリー（現在の奥さんと一人娘エレナ）がヨーシュカ宅を訪れていましたし、僕も二度カティさんと一緒にトマス宅に招待され楽しい時間を持ちました。結婚とか

恋愛とかに限定されない男と女の良い関係というものを僕は信じる性質なので、カティさんとトマスさんの関係に何の違和感も覚えませんでしたし、彼女の言うように「自然な」感じを持ちました。

ここで、ハンガリーの離婚事情について一言補足しておく、一般に離婚率の高い東欧諸国の中でもハンガリーは東独と並んでトップ水準にあります。少し古くなりますが1981年の統計では、人口1,000人あたりの結婚数(再婚を含む)7.2人に対し、離婚数は2.5人。3組の結婚に対し1組強の離婚という計算になります。結婚2組に1組強の離婚というアメリカほどの数字でないにしてもかなり高い離婚率です。僕の短い滞在中にも知人のうち2組のカップルが、1組は協議離婚、もう1組は夫の蒸発(ハンガリーでしばしば見受けられるケースといいます)という形で別離を経験しました。しかし、僕の遭遇したのは特殊例と言えないようで、当地に長く滞在する日本人の一人の言うところによれば「身近な人がいつの間にか離婚していたり、再婚していたりするので相手の家族の状況など気軽に聞けずに困る」とのことです。一般に東欧社会主義国の離婚率の高さは、女性の経済的独立度の高さと、早婚という要因から説明されることが多いようです。僕もそれを否定する気はありませんが、カティさんや知人の例を見ていると、何よりもこの国の人々の愛(男女関係における)を求める欲求の強さということを離婚率の高さの基底要因として指摘したい気持ちになります。そして、この点で彼らはアメリカ人と同類のように思えます。

さて、カティさんの前夫トマスさんは今は化学エンジニアですが経済学部を卒業しており、経済問題に詳しく僕達は有益な議論を持ちました。とてもキュートな、トマスさんの一人娘エレナとの交流も楽しいものでした。現在20才で観光サービス業従事者(通訳、ホテル・インフォメーションなど)養成の高等教育機関(カレッジ)に通っています。この学校に進むのは難関で、彼女の場合も一浪してから入学できたといっています。ハンガリーでも高等教育機関への進学率向上(たとえば、18~22才の年齢層に占める昼間学生の比率は70年に6.3%であったのが81年には9.4%に増加)にともない受験競争は厳しくなる傾向にあるようです。但し、受験に失敗した際日本の若者のようにフルタイムを使って予備校ないし自宅で次の受験機会に備えるという特権はハ

ンガリーの若者には与えられておらず、高卒で就職する者と同じように昼間働きながら捲土重来を期さなければなりません。エレナの場合もそうでした。彼女は、通っている学校がそれに力を入れているせいか外国語が得意で特にアメリカ語を流暢に話します。「父は化学エンジニアだけど、私は化学が大嫌いで元素記号を見るたびに頭痛がするの」と笑い転げる陽気な娘で、彼女といるとヤンキー娘と一緒にいるような華やいだ気分になります。彼女をモデルにしてドナウ・パルトの名所をビデオ撮影したのもブダペスト生活の楽しい思い出です。

カティさんの話に戻りますが、彼女も仕事のグラフィックデザインの他、油絵を描きますし文学、音楽を愛します。歴史への関心も深く今の彼女のテーマはフランス大革命前後の思想家の研究、その中でもボルテールに注目しています。マルクスではないけれど「人間に関係するあらゆる事柄に関心」があるので、早く仕事を止めて好きなことだけに専念する生活を送りたいのだけれど、ヨーシュカの年金だけで生活するのは苦しいので働きつづけていると言います。たしかに、日本と比べれば断然すぐれているこの国の年金制度ではありますが、近年のインフレーション（80年代前半は毎年2けたに近い物価上昇率）で老後の生活は苦しくなっているようです。それはともかく、カティさんは旅も好きでとりわけイタリアの都市と人を愛します。表現力豊かな彼女のイタリア来談を聞いているうちに僕も行きたくなり、来年彼女と一緒にベニスとフローレンスを旅行する計画をたてました。（ハンガリー人の外国旅行熱は盛んで、80年代前半の統計によれば、年間2人に1人の割合で外国旅行をし、そのうち10人に1人が非社会主義諸国——主として西側諸国——に出かけています。従来、交換可能通貨国への旅行認可は3年に1度でしたが、82年以降1年に1度——30日間——に緩和されています。但し、外貨購入が可能なのは今でも3年に1度なので、毎年出かけるためには何らかのコネを利用した外貨入手が必要となります。カティさんのコネクションは西独に住む義娘とカナダに住む叔父さんです）。本当に彼女は感情表現が豊かなのですよ。僕が帰国する時フェリヘジ空港まで見送りに来てくれたのは嬉しかったけれど、ストレートに別れの悲しさを表現するものだから、なかなか別れられず困ってしまいました。一途な人で好きになればどこまでも相手の中に入

っていくタイプ。そんな人を僕も好きですから、二人の関係は良好で「親子」のように親密になってしまいました。僕の住んでいた部屋はもともと彼女のお母さんが住んでおられた所で（僕の到着の3ヵ月前に亡くなられたとのこと。最愛の母を失い、カティさんはしばらくディプレッションに陥ったとのこと、僕が住み始めて空白感が取り除かれたと言います。ちなみに、ハンガリーでは二世帯同居の場合、妻側の両親と同居するケースが多いとのことです）シックな雰囲気の良い部屋ですが、ライティング・デスクや書棚を置くと狭いだろうと、こちらが注文もしないのに来年4月に僕が再訪問するまでに改造して広くしてくれると言います。その親切に頭が下がります。

(3)

ここで話題を転じて、現在のハンガリー人の市民生活と関わりの深い一つの経済問題について述べておきたいと思います。

僕がヨーシュカ夫妻から借りた部屋の家賃は月額6,000フォリント(Ft.)でした。ブダペスト到着時は円高の影響で1Ft=4円を切って3円台でしたが、前後数ヵ月を平均すると4円なので日本円に換算して24,000円となります。1DKの広さですが、ベッドルームは8畳程度あり、シャンデリアの間接照明、壁には絵画に造脂の深い夫妻の選んだ趣味のよい油絵数点が飾られ、ベッド・カバー、テーブル・クロスには見事なハンガリー刺繍が施されており、こうした上品な内装と前に述べた周囲の環境の良さを考慮すれば、月額24,000円は日本の標準からして決して高くはありません。でも、高卒・大卒いずれの初任給も月額約4,000Ft、一般労働者平均給与6,000Ft程度のハンガリー人にとっては相当な額にあたります。ハンガリー人が公営住宅に住む場合の家賃について聞き逃がしてしまいましたが、これより数段安い家賃であることは間違いありません。

ところで、僕がここで話題にしようとしているのはハンガリーの住宅事情のことではなく、ヨーシュカ夫妻が自分達の部屋を貸すことによって生計の足しにしていることもその一例である「セカンドエコノミー」の問題です。

「セカンドエコノミー」というと闇経済を連想しがちですが、ハンガリーの場合、とりわけ82年の法改正以後その大半は合法的経済活動の範疇に属するものとなっています。セカンドエコノミーとは、要するに社会主義セクター

(国有、協同組合有)以外の所で営まれる経済活動の総体のことです。これには大方の社会主義国に存在する、国有ないし協同組合農民家族の家庭菜園耕作・家畜飼育(自給及び市場販売)の他、労働者・勤労者がそれを行うケース、勤務終了後国有企業労働者が有志グループを作り自分達の工場設備を借りて請負い生産を行うケース、国有企業労働者が特技を生かしアルバイトとして知人の住宅建設、清掃、耐久消費財の修理を行うケースなど種々多様な副業的活動が含まれますし、本業としての(フルタイム)私企業活動(ハンガリーでは雇用の上限7人)をセカンド・エコノミーのカテゴリーに含む場合もあります。ヨーシユカ夫妻が行っているような部屋貸しも当然セカンドエコノミーのカテゴリーに入れて差しつかえないでしょう。

こうして、最近の統計によるとハンガリー全世帯の $\frac{3}{4}$ が何らかのセカンドエコノミーに従事しており(工業・建設労働者の70%, 農業従事者の90%, 精神労働者の20~25%, 年金生活者の40%), セカンドエコノミーが提供する生産物とサービスの総計は住民総消費の $\frac{1}{2}$ に達するといえます。さらに、ハンガリーの著名なエコノミスト、コールナイの近訳書『経済改革の可能性』(岩波書店, 1986年)によると、ハンガリーの平均的勤労者の正規を超える(つまり、国有企業・協同組合での就業時間外での)労働時間——セカンドエコノミーに従事する時間——は週あたり10~30時間に達するといえます。(35頁)。また民主化運動の活動家として知られる社会学者セレーニとコンラード(後者は作家としても著名。日本語訳のあるものとしては『ケース・ワーカー』恒文社, 1982年)両氏の近訳書『知識人と権力』(新曜社, 1986年)によれば、ハンガリーの平均的市民がセカンドエコノミーから得ている収入は総収入の10~20%に相当するということです(363頁)。

統計に示されているこうした、いわばセカンドエコノミー花盛りの状況は、僕の2ヵ月半の短いブダペスト滞在の実感でもありました。たとえばタクシー・ドライバー。交通料金が安いのと(市内バスは全区間3 Ft = 12円, 地下鉄・路面電車は2 Ft = 8円)、早く地理に強くなろうという意気込みから、できる限りタクシーに乗らないよう努めたのですが、時間のない時や初めての地を訪問する際にはどうしてもこれを利用することになります。その際、タクシー・ドライバーの多くが、レストランのウェイターや各種商店従業員

と比較して外国語に強いのに驚き、ある時そのわけを一人のドライバーに尋ねると、学校教員、翻訳家、技師などインテリゲンチヤに属する人々がしばしば副業としてこの仕事に従事しているとのことでした。そのことを教えてくれた、本業が医療技師というドライバー——英・仏語に堪能——が「教育関係者の給与が低いのは東欧社会主義国の一般的特徴だが（日本もそうですが）、科学者の給与まで低いのは特殊ハンガリー的狀況。こんなことでいいのかね」と語っていたのが印象に残っています。また、他のセカンドエコノミーの例について言うと、国营スーパーマーケットで買いたい物を入手できないという不足現象にそれほど僕は直面しなかったのだけれど、おいしいパンやコルバースを食べたい時は私営商店を利用しましたし、野菜・果物類はほとんど「ピアツ（＝自由市場）」で購入しました。衣料品も「アール・ハーズ（＝国营百貨店）」でよりも、英雄広場東側の緑豊かな市民公園を散策しつつ、各所に散在する可愛い木造の私営ブディックに立ち寄り気に入った物を購入することが多かったように思います。理髪は、国营男性専門店の評判が概してよろしくないのに、女性専門店のヘアー・ドレッサーに依頼しましたが、それは彼女の副業として扱われ、価格は100Ft＝400円と国营理髪店の価格と比べかなり割高でした。

さらにある時、幸運にも人口200万の東欧最大の都市ブダペストに2軒しかないと言われる私営ビデオ・レンタルショップのマスターに偶然出くわしました。ビデオ・レンタルショップと言っても、日本のようにビデオ・テープを賃貸するのではなくて、ここではカメラ及びビデオ・デッキなど機器のレンタルです。あなたも知っているように、海外を歩きながら気に入った景色や知り合った人々をビデオに記録するのが僕の趣味。ブダペストにもデッキ付きビデオカメラを持参しました。滞在中写り具合を確かめたくて当地のTVに接続したのですが、ヨーロッパと日本ではシステムが異なるので映像が出てきません。日本製ビデオ・デッキと接続可能なTVでないのだめなのです。やむなく、輸入用品店が軒を並べるブダペスト一の繁華街、ペトフィー・シャンドル通りの大きな電器店に出かけたのですが、ここでも入手不可能。途方にくれていると、店員とのやりとりを聞いていた客の一人、背丈2メートル近い大男が横から割り込み「あんた、俺の家に来なよ。探しているも

のがあるから」と言います。ブダペスト—大きな電器店にないものが個人の家に
あるものかと半ば疑いつつ、それでもいかつい身体に圧倒されてのこのこつ
いて行くと、そこがビデオ・レンタルショップであったというわけです。マス
ターによれば、3年前に工場勤務をやめ、叔父さんと2人でこの私営レンタ
ルショップを始め、フルタイムこの仕事に従事しているとのこと。ビデオ
製品に関し比較的需要はあるのに、国産ビデオ機器はなく、輸入品も稀少
なため、このレンタルショップはなかなか繁盛しているようでした。僕が店
にいる間にも、20才前後の若者達がパーティその他に利用するとかで入れ替
り立ち替りここを訪れていました。TVレンタル料は1日300Ftと割高でし
た(レストランでフルコースを取り、チップを付加したとしても200Ft程度
で済みます—但し、今年5月にオープンしたブダペスト初の日本食レストラ
ンは高く、定食で400Ft程度します—から1日300Ftのレンタル料は高いと言
えるでしょう。ちなみに、レストランにも私営、あるいは混合形態—設備は
国有、個人・グループが経営を請う—があります)。

以上を計算すると、僕のセカンドエコノミー向け消費は、統計上の平均(総
消費の $\frac{1}{6}$)をはるかに越え総消費の8割以上となります(住宅費6,000Ft込み
で月額支出は10,000Ft=40,000円程度で済みましたから)。ヨーシュカ夫妻に
しても、収入に関して言えば、ヨーシュカさんの年金収入を除けば、カティ
さんの仕事からの収入(家庭でグラフィック・デザインの仕事をしており個人
営業)も僕からの家賃収入もセカンドエコノミーからの収入。たぶん収入
に占めるセカンドエコノミーの比率は統計上の10~20%という数字を大幅に
越えるに違いありません。支出に関しても、カティさんと僕はよく連れだっ
て買物に出かけたのですが、彼女がいつも利用するのは私営商店とピアツ。
他方、自動車修理、部屋の清掃、住居の建て増し、風邪をひいた時の往診な
どに際しては、幅広い交友関係を利用し知人に依頼し謝礼を支払っていまし
た(セカンドエコノミー)から、支出に占めるセカンドエコノミーの比率も
統計上の数字(総消費の $\frac{1}{6}$)を上回ることは確かなように思われます。

ところで、以上のようなセカンドエコノミー活性化の状況は、1968年以来
この国が追求してきた独自の経済政策—マクロ的計画は堅持しつつも、市場
のメリットを最大限利用し効率化をはかる—の延長線上にあり、初期の国有

セクター内改革に次ぐ改革第2弾の性格を持つものですが、これを市民の側から見れば、一般的にセカンドエコノミーは彼らにとって何よりも生活防衛の手段であるように思われます。2度のオイル・ショックを経て70年代末以後ハンガリー経済は他の東欧諸国と同様に停滞します。そして対外債務返済のため緊縮策がとられた結果、80年代前半には実質賃金も5%も低下することになります。そうした状況にあつては、生活水準を維持するためにセカンドエコノミーにでも頼らざるを得ないというわけです。

とは言え、生活防衛の域を越えてセカンドエコノミーが社会主義セクター内の労働では到底おぼつかぬ程の富の蓄積に結びつく例もあるようです。僕の知っている身近な例で言えば、たとえば近所のピアツに出店を持つ農婦のユディットさんがそうでした。明るい威勢のよいおばさんで買物の時二言三言彼女と覚えたてのハンガリー語を使って世間話をするのが僕の楽しい日課の一つだったのですが、カティさんによると彼女はセカンドエコノミーでの成功者、「質素な身なりをしているけれど田舎の大豪邸に住んでいる」とのことでした。また、昨年5月初めてハンガリーを旅し、古都エステルゴムまで足を伸ばした時偶然知り合いになった高校の先生を今回再訪したところ、彼は既にオモチャの行商人（個人営業）に転職していたのですが、その動機はこの分野で友人が成功しリッチになったからというものでした。

このようなハンガリーのセカンド・エコノミーをめぐる最近の動向と関連して、前述のセレーニとコンラードの著書は次のような興味ある分析を行っています。彼らによれば、80年代前半のハンガリーは実に奇妙な国です。成長率はゼロ近くになり、実質賃金は低下。このような状況下でならポーランドの連帯運動に類した何らかの運動がハンガリーで起きても不思議でないのに、人々は組合問題などで頭を悩ますどころかセカンドエコノミーから得た収入で「大衆消費の共産主義」を謳歌していたと言うのです。セカンドエコノミーは経済危機にあつて「体制の安全弁」として機能したというわけです。これに続けて、彼らは、この傾向が続けばハンガリーに「社会成層における二元構造」が出現するのではないかと予測を示しています。これまでハンガリー社会で上昇志向を満たすには官僚的出世という一本のルートしか存在しなかったのだけれど、今後はこれに加えて市場ルート出世コースが開け、

その結果上層部が二元化するだろうというわけです（以上は前掲書362～369頁）。もちろん、セレーニたちの所論は現実傾向の拡大図であって現状そのものの描写ではありません。とは言え、現状においてもセカンドエコノミー活性化に由来する社会的変動とコンフリクトについて改革派エコノミストさえ若干の危惧を持って眺めているようで、たとえばコールナイの前掲書は、セカンドエコノミーが効率化に果たす役割を積極的に肯定しつつも、他方においてセカンドエコノミー受益者と、そうでない者（これには重工業従事者のようにその技術を副業化しにくい一群の労働者、年金収入以外あてのない高齢の年金生活者などが含まれます）の格差を是正する社会政策の必要性を強調しています（46～49頁）。

セカンドエコノミーと関連を持つ問題点について言えば、貨幣物神化の風潮の広がりといった問題もあるようで、ヨーシュカさんやトマスさんのように物欲と縁の薄い人達からすれば、近年若者達が「拝金主義的」になっていることが気にかかる様子です。話が少し脱線しますが、物欲、拝金主義と言えばこれに関連したおもしろいエピソードがあるので。ヨーシュカさんと前妻の間に生まれた娘さんがドイツ人と結婚、今西ドイツに在住しています。それでヨーシュカ夫妻は毎夏この娘一家を訪問しているのですが、夫妻ともドイツ人の娘婿に不満を持っています。「私達夫妻は、タキ（僕のハンガリーでの呼び名、タクミは彼らにとって発音しにくいようです）も知ってのとおりおしゃべり好き。色々なことをじっくり話し合いたい。ところが娘の亭主ときたら人は好いのだけれど、話と言えば自分の会社（スポーツ用品メーカー、アディダス）のことと金儲けのことばかり。帰宅しても会社の仕事をしているか、あとはTVを見ながらビールを飲んでいるだけ。何が楽しみで生きているのかね。娘もあんな亭主と一緒にいるのかね。その点日本人はいいね。古い文化を持っていて皆心豊かで」。ドイツ人も日本の平均的サラリーマンとよく似ているのだなあと思いながら彼らの愚痴を聞いていた僕は、それとは180度異なる彼らの美しい日本人観を示されて戸惑ってしまいました。彼らの表情からして、お世辞を言っているようには見えません。実際のところ、幸いなことに「醜いエコノミック・アニマル」という日本人に対する風評は今のところまだ東側世界にはそんなに浸透していないようで

す。僕の知る限りで言えば、少なからぬハンガリー人が「日本人は勤勉さと器用さで経済大国を築いたけれど、傲ることのない、古い伝統文化を持つ心豊かな民族」というイメージで日本人を見ているようです（そう言えば、ポーランド「連帯」のワレサ委員長が来日の際そんな日本人観を披露していましたね）。それが日本の現在の真実と一致しているのなら何と素晴らしいことでしょう。しかし、ハンガリーにまでわざわざ足を伸ばしながらこの国の豊かな文化に触れようとせず、ただただ物質的生活の不便さについて不満を並べたてているいく人かの日本人滞在者の例などが念頭に浮かぶとつい「西側諸国ではドイツ人よりも日本人の方が輪をかけて物欲的、それに近年ますます傲慢かつ排他的になっているともっばら評判なのですよ」と彼らの美しい日本人観をぶち壊すようなことも言いたくなります。ついでながら、ハンガリー国営テレビで例のどこかの首相の「知識水準発言」が取り上げられた時は本当に日本人として恥ずかしい思いをしたものです。

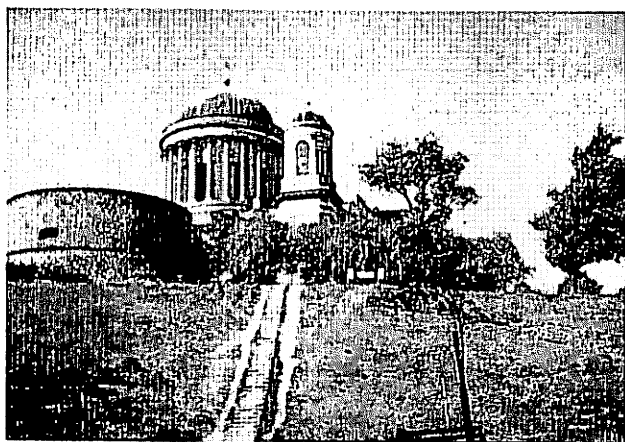
話を元に戻しますが、ハンガリーが今直面しているセカンドエコノミーと関連する前述のような問題は抽象的には次のように表現できるのではないかと思います。 Kommunismusの理想はマルクスも述べているように最終的には「物質的生産（＝経済）の彼方」で実現されるものなのだが、そこに到達するためには経済（＝効率化）の論理を一度は通過せねばならず、この論理は油断すれば容易に人間のエコノミックアニマル化と結びつくということです。

他方でしかし、ハンガリーの人々の労働と生活の様式——ゆったりとした仕事ぶり、長い食事時間とおしゃべり、生活に溶け込んだダンスと音楽など——を見ていると、セカンドエコノミーと絡む諸問題も彼らにとっては杞憂に過ぎぬことのようにも思えてきます。それが楽観的な見方でなければいいのですが。

(4)

再び、ブダペストで会った人の紹介に戻ります。カトナファミリーのことです。昨年春ブダペストを初めて訪問し、古都エステルゴムまで足を伸ばしたことについては前に述べたとおりですが、その帰路ドナウを下る船上でカトナ・エステルさんという僕と同世代のブロンド髪の知性的な美人と知りあい、日本のことハンガリーのことなど3時間ほどディスカッション（エステ

ルゴムからブダペストまで船で約5時間かかります)を持ち意気投合、帰国後何度か手紙のやりとりをしていたのです。そんな前提もあったため、今回は8月下旬にブダペストに着いた当日から彼女の家に招待され、帰国まで2ヵ月半の間、毎週のように彼女の家族と会う機会を持ちました。エステルさんは大学の英語の先生でイギリス留学



(古都エステルゴムのバジリカ)

の経験を持ちきれいなクィーンズインイングリッシュを話します。政治、経済、国際情勢、女性の問題など広い領域に関心を持つ一方、音楽を愛しアマチュアのオーケストラのメンバーでチェロを弾きます。彼女のオーケストラグループのコンサートを2度聴きに行きました。

エステルさんの家族は機械エンジニアの夫カルマンさんと、2人の可愛い娘。10才のマルトと7才のドーリ。カルマンさんは少しドイツ語ができますが英語はだめ、そこで僕たちの会話では、僕がハンガリー語で話せる話題以外はエステルさんが彼のハンガリー語を英語に、僕の英語をハンガリー語に通訳してくれます。子供達はハンガリー語しか話さないのだけれど2人ともボディ・ランゲージが豊かだから彼女達とのコミュニケーションに通訳は不要です(ハンガリーの子供達は一般に表情が豊かで、特にリズム感において優れているように思います。ハンガリーが生んだリスト、バルトークと並ぶ世界的音楽家コダーイの開発した教育法で幼い時から自然に音楽に接しているせいでしょうか)。2人とも愛くるしいのだけれど、マルトが少しシャイなのと比べ下の娘ドーリには全く人見知りというものがなく初対面からうち分け、二度目に会った時には勢いよく駆け寄り僕に跳びついてきました。一般

にあまり子供好きでない僕も彼女達とは良い友人になりました。帰国前に会った時、彼女たちは見たこともない日本の風景を想像して描いた可愛い絵をプレゼントしてくれました。毎晩眠る前にカトナ夫妻が本を読み聞かせているせいか（僕も2人に日本の昔話をせがまれ、日本語で桃太郎の話をしてやりました。エステルさんによれば子供達にストーリーは十分伝わっていたとのことです）2人とも想像力が豊かです。この子供達と再会したいというのが、僕の来年のブダペスト再訪の最大の動機なのかも知れません。パリ旅行の帰路ブダペストに立ち寄った知り合いの女子学生ゆう子さんも僕と一緒に一度カトナファミリーを訪問したのですが、すっかり子供達と仲良くなったようで、彼女が帰国した後、僕一人で子供達と会った時には「ゆう子はなぜ来ないの」と落胆した様子で問いつめてくるので、彼女が帰国しなければならない事情を説明するのが大変でした。

エステルさんの夫カルマンさんも魅力的な人物です。彫りの深い顔立ちに日本人のような黒い髪、立派な口髭と、ラテン系ではないかと思わせる二枚目です。他方で、ゆう子さんと、前に述べたバイオリニストよう子さんの2人に「ハンサムね」と言われて照れる様子は少年のようでありましたが。少し話がそれますが、よう子さんは昨年秋から当地の「リスト音楽学院」でバイオリンを習っている留学生。もともと日本のオーケストラのメンバーでしたが、もっと勉強したくてブダペストにやって来たと言います。24才、童顔のせいか年よりずっと若く見え笑顔の可愛い娘さんですが、日本人特有の感情の細やかさを失わずにしかもはっきり自己主張のできるすぐれたパーソナリティの持主です。一人で異国生活を立派に送っています。彼女とはハンガリー語のインテンシブ・コースで出会ったのですが、「ルスタ（なまけ者）」という烙印をおされた出来の悪い生徒の僕を、先輩格の彼女が色々面倒をみてくれたので助かりました。今年の6、7月にアメリカ西海岸を旅した時も彼女のような日本人女性に多く出会いました。そんな時たのもしくそして嬉しく思いましたが、同時に日本社会はこのような若い女性のエネルギーを受け入れ存分に発揮させるような土壌をおそらくは持ち合わせていないだろうと想像し複雑な気持ちになります。7回の、しかもそのほとんどが短期というその意味では狭い僕の海外旅行体験からの感想なので普遍化するのは誤りかも

知れないけれど、日本に住む日本人よりも魅力的な外国滞在の日本男性に会う機会がほとんどないのに対し、外国で、日本でよりも伸び伸び生きているかに思われる日本人女性に会う機会が多いから(会う人すべてがそうだと思うつもりはもうとうありませんが)このような感慨を持つのです。

さて、カルマンさんのことに戻りますが、外見のみならず中味も充分魅力的な人物です。エンジニアとしての仕事のことのみならず、政治・経済全般についても関心が広く、僕たちは会えばいつでも東欧情勢、東西関係、原発問題など政治問題について議論しました。彼のハンガリーの現状についての評価は「カーダールは、たしかに他の東欧諸国のリーダーと比べればベターではあるけれど、対ソ関係などの制約条件を前提としたとしてもカーダール政治以上のことをハンガリーで行うのは可能なことではないか」というものでした。僕の知る限り、カーダール政治を受け入れつつ、同時に他方で遅い改革のテンポに不満を持つというのが、政治に関心の強いハンガリー人の一般的な自国評価であるように思います。そして、カルマンさんがふと洩らした言葉「西側の大国のようにならずともよい。せめて北欧の小国のような状況まで行けば」というのが、そうした人々の希望のレベルであるような気がします。

また、カルマンさんからは、現在この国で進行中の「労働者自主管理方式」導入の状況について現場の様子を聞きとることもできました。1984年の国営企業法改正により、国営企業レベルで(公共性の強い一部大企業を除き)、大企業には企業評議会、中小企業には勤労者総会が意志決定の最高機関として設けられる運びとなり、87年施行に向けて現在その準備が着々と進行中なのです。これが実現すれば、労働者の企業自治と社会の民主化に向かって大きな前進になるように思えますが、カルマンさんはそのような評価には懐疑的でありました。彼の指摘する問題点の一つは、ハンガリーの企業評議会はユーゴスラビアの労働者評議会とは違い、その成員全体を労働者が選出する方式とはなっていない(労働者代表は半数程度、残りは管理者側代表)ので、実際には企業評議会の決定が管理者側に誘導されやすい状況が生まれるのではないかということです。さらに、より根本的な問題ですが、カルマンさんには、ユーゴスラビアの経験の総括として、労働者自治の社会の民主化に及

ばす効果というものについての懐疑があるようでした。したがって彼によれば、ハンガリーにおいて現在必要とされる民主化は狭い企業レベルに限定されるのではなくて、マクロレベルでの民主化ということになります。マクロレベルでの民主化とは、端的に言って複数政党制の導入を意味するのかと尋ねますと「いやそれは無理だろう。しかし、何らかの意味でのブルーリズムの導入が必要なことはたしかだ」というのが彼の回答でした。

カルマンさんのみならず、僕がインタビューした改革派エコノミストの全てが口を揃えて政治の民主化の必要に言及しつつも、誰一人として複数政党制の導入を公然と主張しなかったことからみて、他の東欧諸国に比して民主化の進んでいるハンガリーにおいてさえこの問題はまだタブーとなっていると言ってよいのでしょうか。しかし、多くの人がちらが心配するほど公然と当局を批判しますし、僕から見れば、ハンガリー社会には限定的ながら、既にある種の政治的ブルーリズムが機能しているようにも思えます。国営テレビが、ハンガリー動乱30周年記念特別番組に体制批判派として著名なヘゲディッシュ(日本語訳のあるものとして『社会主義と官僚制』大月書店、1980年)を一解説者として登場させていることにもそれが示されていると言えるでしょう(もっとも、動乱直前、彼は首相を努めていた点から見てある意味では当然の措置なのかも知れませんが。それにしても、体制批判派をTV番組に登場させるとは他の東欧諸国では考えられないことです)。

とは言え、体制批判派のうちでも特定グループ、個人については当局の眼も厳しいようです。ハンガリー版サミズグートを見せてくれ、肅清犠牲者ライク・ラースローの子息(民主化活動家)と会うよう薦めてくれた(結局会うことはできませんでしたが)T夫妻(ドナウ川辺りのワイン酒場で偶然知り合ったのです)の言によれば「今の政治状況はそれほど悪くないから良いものの、数年前には私達もマークされていた。当時、警察に踏み込まれる夢を何度も見た」ということです。当局の体制批判派に対する許容度(僕はそれを民主主義のバロメーターと思います)といった微妙な問題は、もっと長くこの地に滞在しないと本当のところはわからないものなのでしょう。

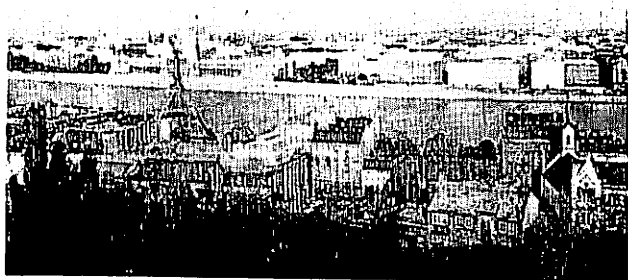
カルマンさんの話に戻って、議論する時の彼の意欲的な目が今でも印象に残っています。でも、エステルさんと2人の娘に向けるまなざしはとても暖

かい。また、エステルさんを通訳にして僕と彼が話している時、彼とエステルさんの見解が食い違うことがあり両者の間で激しい議論が闘わされることがありましたが、見ていてさわやかです。ヨーシュカ夫妻といい、カトナ夫妻といい強い愛情と信頼で結びつけられながら（いや、そうだからこそというのが正確なのでしょうが）議論する時は対等にわたり合う、そんな男女関係を僕は羨ましく思いました。そのような関係は女性のみならず、男性もまた望むところではないかと思います。

(6)

ブダペストで会った素敵な人々のうち、もう一人どうしても書き留めておきたい女性がいます。リドビッチ・アンナ。スラブ系の姓ですが、彼女の両親のいずれもハンガリー生まれのハンガリー育ちといえます。彼女とも昨年知り合いになり文通を続けていました。前に述べたセーチャーニ橋左岸ブダ地区の小高い丘に王宮博物館があります。ここから街を見おろすとドナウの向う岸にゴシック建築の国会議事堂が一望でき実に美しく思わずジス・イズ・ブダペストと叫びたくなりますが、この博物館で彼女は外国人訪問客相手にガイドの仕事を
しているのです。

英語とロシア語の双方ができます。レニングラードに留学経験があり、ロシア語の方が得意だと言いますが英語もなかなかた



漁夫の砦から。ドナウの向う岸がゴシック建築の国会議事堂

いたものです。職を持ちつつブダペスト大学に通っており、今最終学年。美術史が彼女の専攻分野。父親も兄もブダペストで名の知れた画家、母親も絵をたしなむという美術一家です。彼女にそう言う、いや正確に言う一人美術に無縁な家族がいるし、半人まだどうなるかわからないのがいるとの返事。一人はハズバンドのイシュトバーン、半人は12月出産予定のおなかの

赤ちゃん。イシュトバーンはコンピューター・エンジニア。初めて彼に会った時、顔も話し方も草刈正雄にそっくり、あまりよく似ているので彼の英語まで日本語に聞こえました。僕は絵は好きですが、現在の画家の名前に疎いので正確なことは言えないのだけれどアンナの父親はたぶんハンガリーのみならず他の国でも知られている画家なのだと思います。世界各地で個展を開いており、日本でも数年前彼の個展が開かれ、その際通訳として彼女も父親に随行して来日したとのこと。それはそうとハンガリーは音楽の国としてよく知られていますが、絵画も盛んで街のあちこちで個展が開かれています。画家の友人の多いカティさんなど「ブダペストは絵かきで一杯だよ」と言います。しかし、バスや郊外電車で30分、セルビア人の築いた美しい町センテンドレまで足を伸ばせば、もっと美術の世界に深く浸ることができます。画家をはじめ彫刻家、建築家などハンガリー一流のアーティストの多くがこの町に住み創作活動を行っているからです。

ところで、アンナはユーモリスト。気さくで他愛もない冗談を始終とばしていますが、時にはかなり辛らつな、それでいて的確な風刺もします。それにかかなりの程度おっちょこちょい。自分の街ブダペストのしかも目につき易い所に行く道をしばしば間違えます。ハンガリーでフレンドリーで親切な人には多く出会ったけれど、こんなタイプは彼女が初めて。オープンな性格に加えて、表情が何となく日本人とも似ているところから、彼女といると外国人といえるのを全く意識することがありませんでした。普通、外国生活においては、相手と対面している時よりも電話で話す時の方が、表情を読み取れないがゆえに外国語を聞き逃してはならないと緊張するものですが、彼女との場合その緊張もありませんでした。それが実は失敗のもと。ある夜の電話で彼女が「私の友人でカール・マルクス大学で経済学をやっているのがいて、彼にタキの話をしたら、是非友人にも呼びかけてミーティングを持ちたいというのだけれどどうする?」「何人ぐらいのミーティング?」「シックスティーン・オア・セブンティーン」「何を話せばいいの?」「何でもいいわ」「日本語のできる人はいるの?」「いないわ。出席者の大半は英語が出来るから英語で話せばいい。英語のできない人には私が適当に通訳するから大丈夫」というので、学生相手の16~7人のミーティングで好きな話題で話すのならそん

なに気も張らないだろうと気軽に引き受けたのです。しかし、集まる人数を正確に聞いておくべきだったし、彼女の友人のことをもっと詳しく聞いておくべきだった。当日ミーティング会場に出かけてみると出席者は60~70人 (sixteen or seventeen ではなく sixty or seventy だったのです)。それに、彼女の友人は学生ではなく大学教員で、彼は自分の学生のためにミーティングをセットしていたのです。さらに彼の同僚も10人ばかり出席。その中には論文を通じて知っている著名なエコノミストもいます。ミーティングの時間は3時間。僕に与えられた時間は何と1時間半もの長さ、その後僕の報告をめぐって参加者との間で1時間半のディスカッションも持つといいます。要するにそれだけの時間を使って、ハンガリーのエコノミストと経済学部の学生に向かって自分のこれまでの研究成果を英語で披露せよということなのです。これはきつすぎる。話が違うではないか。若干狼狽の色を見せる僕の顔色を見つつ彼女いたって冷たく「私うそは言っていないわよ」と言い放つ。たしかにそうです。僕が詳しく聞かなかったことと、聞き間違いが重なっただけのこと。追い撃ちをかけるように、彼女の一声「タキ観念しなさい」。観念したからなのかどうかわかりませんが、自分で言うのはおこがましいのだけれど僕の講演もそんなにまずくはなかったようで、その後も2度違うテーマで講演するよう要請があり、これも無事こなすことができました。アンナも僕の舌足らずの英語を訂正してくれたり色々協力してくれ助かりました。海外での講演は初めての経験。こういう場での若干の自信もつきました。「災い転じて福となす」といいますが、今度の場合「間違い転じて福となる」。しかし、よく考えてみれば、ミーティングの内容について事前に正確に知っていたとしても、アンナからの要請ならおそらく拒否せずに引き受けたように思います。彼女のおおらかな性格は他人をも巻き込んで楽天的にさせるのです。来春、彼女一家と再会するのが楽しみです。そして彼女のような性格の女の子(男の子でもさしつかえありませんが)と初対面できるよう無事出産を祈ります。

(7)

最後に、僕が行なった講演と、その後の討論の模様を簡単に付記しておくことにします。

3回の講演テーマはそれぞれ「ハンガリー経済の現状と課題」、「中国経済改革におけるハンガリー的要素」、「日本経済と産業構造」というものでした。

2番目までは僕の研究分野に属すテーマだから良いとして、全く門外漢の日本経済について語る羽目に陥ったのにはわけがあります。最初の講演に参加していた人々が、「ハンガリー経済にとって焦眉の課題は、輸出志向の産業構造の形成にある。この課題に日本は成功している。その秘訣について日本人エコノミストの説明を聞きたい」と要請してきたからなのです。やむなく引き受けたのですが、ハンガリーに持参した日本経済に関する著書はただの一冊。講演準備期間は3日間。全くのところピンチでした。それでも徹夜の準備の甲斐あって、講演ではオイル・ショック以後の日本経済の構造再編過程についてひととりのことはフォローできたのですが、講演後の討論では参加者の鋭い質問に充分には答えられず冷や汗の連続でした。とは言え、ハンガリーのエコノミストの日本経済に対する関心のあり方を知ることができ、胃の痛むような経験も僕にとって有益だったと思います。

中国経済改革に関するテーマは、僕自身が設定したものです。現在進行中の中国経済改革の型がハンガリー型であるというのは日本の社会主義経済研究者の通説であり、コールナイなどハンガリーのエコノミストが近年中国を訪問、ハンガリー改革の教訓についてサジェスションを与えていることもあり、ハンガリー改革と中国改革の比較というのもハンガリーのエコノミストにとって興味あるテーマだろうと思い設定したのです。そして、講演後色々立ち入った議論ができると期待していたのですが、予期に反し実際には拍子抜けの結果に終わってしまいました。参加者の中国経済についての関心はさほど強くなく、また彼らの多くは中国の経済改革についての情報もあまり持ちあわせてはおらず(少なくとも日本の社会主義経済研究者ほどには)、両国の経済改革の類似性という論点そのものについてさえ初めて聞いたという人もいる有様だったのです。もちろん、この一例をもってハンガリー・エコノミストの中国への関心度の低さということを一般化するつもりはもうとうありません(たとえば、昨年来訪の際知り合った若手エコノミストのミハーイ・ラキ氏などは、勤務先の研究所を始終訪問する中国人エコノミスト達と討論する機会が多いと言っていましたし、彼の中国経済に関する知識も豊富なものでした)。

しかし、ハンガリーと中国の両国が同じ社会主義国であるが故にエコノミストたちの情報交換も緊密であり、相互に強い関心を持ち合っていると断定するのも逆の誤りであるように思います。僕の感触からして、一般的にハンガリーのエコノミストは第一にはヨーロッパ的視野でものを考えており、社会主義国であるとはいえアジアの中国は彼らにとってやはり遠い国に属するように入ります。よく考えて見れば、歴史的関係、地理的環境からして、体制が異なるとはいえ日本のエコノミストの方がハンガリーのエコノミスト以上に中国に関心を持ち、情報を多く持っているのは少しも不思議ではないことなのでしょう。そしてそれは極めて健全なことであるように思います。

ハンガリー経済をテーマとする第一回目の講演の際は、当然と言えば当然のことなのですが講演者側の僕の方が討論時には講演参加者にあれこれ質問するという展開になりました。その時の成果については、近く予定している論稿において発表するつもりですが、ここで、討論時に興味をひいた点を一つだけ記しておく、アメリカのマネタリスト、ミルトン・フリードマンの著書をハンガリーのエコノミストがよく読んでいるということです。参加者の一人が言うところによると、外国語の著作がハンガリー語に翻訳されるたびに、ここ数年「ルカーチ・ルネッサンス」、「グラムシ・ルネッサンス」などいくつかのブームがあったが、今は「フリードマン・ルネッサンス」だということです。社会主義経済とフリードマンとは奇妙な結びつきで、最初それを聞いた時若干戸惑いましたが、マネタリストの政治的含意(＝反社会主義)を別とすれば、彼らに対し、市場志向的改革を進めるハンガリーのエコノミストに関心を寄せるのもきわめて自然なことなのかも知れません。

これと関連しますが、帰国後、『エコノミスト』誌に掲載されていたコールナイの最新論稿(「ハンガリー改革と市場社会主義」1986年11月11日号)に目を通すと、彼はハンガリーの経済学派を2つに分類しています。彼の命名法によると、一方が「ガルブレイス派」、他方が「ラジカル派」です。ここで、ガルブレイス派とは、ガルブレイスの所説(＝現代資本主義でさえ計画経済を不可欠なサブシステムとして包含する混合経済である)を借りて、これ以上ハンガリーで市場を強化することに反対する保守派のことです。これに対し、ハンガリーに真の意味での「市場社会主義」をうちたてるため官僚規制

を緩和し市場を一層強化すべしと唱えるのがラジカル派ということになります。この分類法で言うと、僕の講演に参加していたエコノミストの多くは「ラジカル派」に属する人々であったと言えるのではないかと思います。フリードマンのパラダイムは、現在、ハンガリーにおいてラジカル派の主張を裏づける一つの道具を提供しているのかも知れません。いずれにせよこのテーマについては、先ほど述べたように、近く予定している論稿の中で詳しく検討するつもりでいます。

※

※

ハンガリーで会った人々を紹介しつつ、あれこれ滞在印象記を書き綴ってきました。以上で紹介してきた人々の他にも書き留めておきたい友人・知人が多くいます。たとえば、僕のハンガリー語の家庭教師を快よく引き受けて下さったヒダシ・ユディットさん。彼女はたぶん僕と同世代で貿易大学助教授、日本に通算3年間住んだことがあり、日本人のように流暢に日本語を話すほか、英、仏、独、露語にも堪能な語学の天才です。それに経済研究所のスタッフのなかで僕がもっとも親しくつきあっていた、これまた同世代の女性エコノミスト、エーンリッヒ・エヴァさん。ブダペストでは30代の女性の活躍が本当によく目につきました。彼女たちによると、女性差別撤廃の戦後改革の影響が最初に及んだのがこの世代だということです。しかし、まだまだ差別の遺産は残っており、たとえば、同程度の能力を持つ男女が一つのポストを争う時、ほとんどの場合男性が地位を得るとのこと。狭い見聞ですが、様々な所で同じポストについている男女を見た場合、女性の方が優れているように見受けられたのはそのせいかも知れません。

そのほかブダペストで会った素敵な人々の紹介は、次に会った時にしたいと思います。とにかく、良い人達に恵まれた楽しい旅でした。しばらく身体は日本、心はブダペストの状態がつづくように思います。

今度会う時、8月以後のあなたの生活を聞けるのを楽しみにしています。北海道はもう雪の季節になりましたね。くれぐれも健康に留意し、来年のアメリカ留学にそなえて下さい。

草々

1986年11月17日